

# 日本点字が生まれて130年 桜雲会が記念講演会

石川倉次がルイ・ブライユの六点点字を元に日本点字を翻案した明治23（1890）年から130年となる2020年11月23日、社会福祉法人桜雲会（一幡良利理事長）は、東京・中野の会場で「日本点字制定130周年記念講演会」を開催した（協賛：一般財団法人 日本児童教育振興財団）。伊藤友治さん（日本盲教育史研究会会長）、岸博実さん（京都府立盲学校非常勤講師）、岩上義則さん（霊友会法友文庫点字図書館館長）の3人の講演に加え、ヴァイオリニストの穴澤雄介さんのコンサートもあり、ソーシャルディスタンスに配慮した会場だけでなく、YouTubeでも多くの人が視聴した。（本誌）

## 倉次の魅力

「日本点字の父、石川倉次先生」の演題で講演した伊藤友治さんは静岡県浜松市在住で、静岡県立浜松盲学校（当時）の校長を務めた経験もあり、遠江国浜松宿に生まれた倉次とは縁が深い。浜松宿の地理や生家跡地の周辺、倉次が祖母と魚釣りやしじみ取りに通った地域の様子を生き生きと描写した。藩校「克明館」で、倉次は抜群の成績を収めたともいう。

明治維新の影響で、倉次の家族も主家に従い、上総国長南宿に移ることになる。小学校を首席で卒業した倉次は、同時に助教として採用され、その後、千葉師範学校でも学び、複数の小学校で教員を務めた。そして、明治17（1884）年、東京の「かなのくわい（会）」で小西信八と出会う。後に倉次を東京盲啞学